

## 保育士と子どもの関係発達

### —社会性の発達に援助が必要と思われる子どもとのかかわり—

Development of relationships between nursery teacher and child  
who may need assistance in social development

鷲尾 昌子

Masako Washio

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 保育・教育学専修

キーワード：保育士，社会性，関係発達

Key words : Nursery teacher, Sociality, Relationship development

#### 1. 研究目的

保育所において、診断はついていないものの、「目が合わない」「声をかけても振り向かない」「あやしても喜ぶ様子がない」など人への関心が薄く相互交流の持ちにくい子どもが入所した場合、継続した特別な援助が必要とされる。

しかし、相互交流が持ちやすいか否かは、関わり手の保育士によって微妙に変わってくるため、特別な援助の必要性の感じ方も様々である。さらに、認知面の発達は目に見えることが可能なことが多く、他児と比べることが容易でとらえやすいが、社会性の発達はとらえにくい。また、対人交流力の弱さから、一人で黙々と遊ぶことが多い場合、「手のかからない子」としてなおざりにされてしまう危険性もある。そのため、周りにいる大人が気づき、社会性の発達を援助することが重要と考える。

ロゴフ (2006) は、発達を社会文化的視点で捉え、「導かれた参加」という概念を提唱している。それは、学びを支援するといった特別な方法ではなく、子どもたちがさまざまな形で文化コミュニティの実践、価値観、技能に参加することが注目される。滝川 (2017) は、社会性の発達は関係の発達であり、周りの人たち (養育者を中心とする大人たち) がすでに共有している世界に少しずつ入り、自分もその世界を共有する一員になっていくプロセスであると述べている。

それぞれの文化があるように、保育所にも子どもと保育士が過ごす在り様がある。保育所は、保育士と子どもを含めた多様な対人関係が日常の流れの中で継続していく場所である。関係の発達を

促すことが、社会性の発達につながるという観点で考えると、個の能力を伸ばすために特別なことをして遅れを取り戻すのではなく、保育所の生活の中で身近な大人たちとのかかわりあいの中から導かれていくというプロセスが重要になると考える。

しかし、このようなプロセスは対人交流力の弱い社会性の発達に援助が必要と思われる子どもには、困難な場合が多い。養育者にとってもその困難さが理解しにくく、養育者自身も不安定になりやすい。そして、さらに交流性が乏しくなるといった負の連鎖になりやすい。

それでは、保育所で養育者となる保育士から見て、人への関心が薄く対人交流力の弱い (社会性の発達に援助が必要と思われる) 子どもに対してどのようにかかわればよいのだろうか。

滝川 (2017) は、定型発達と発達障害との間で発達の<構造>に質的な違いはなく、どちらも同じ道筋で歩いていくと述べている。そして、養育者との共有体験 (感覚・情動・関心・行為) を積み重ねることが相互交流の促進になるとする。それらを踏まえると、保育士との共有体験を積み重ね、相互交流を促進することで、結果的に子どもの社会性の発達を援助することになるのではないかと考える。

西脇ら (2008) は、保育所で広汎性発達障害幼児と加配保育士が週に1回一対一の療育を行い、加配保育士との愛着形成を基軸に、幼児の発達と保育集団での対人関係における行動変容を追った。その結果、幼児の対人関係・ことば・描画などに発達がみられ、安定した保育所生活が送れるよう

になったと報告している。しかし、子どもが発達した点と加配保育士の支援の在り方に目が向けられ、保育士と子どもの相互交流には着目しておらず関係発達の特徴は明らかになっていない。

そこで、本研究では、保育所で社会性の発達に援助が必要と思われる子どもと保育士の関係発達の特徴を明らかにすることを目的とし、関係発達を促す要因を検討したい。

## 2. 研究実施内容

研究助成申請時の課題名は、「社会性の発達に遅れがある子どもと保育士の関係発達の支援」であり、社会性の発達に遅れがある子どもと保育士の関係発達の特徴を明らかにし、子どもの社会性の発達を支援する在り方を検討することが研究目的であった。しかし、現在は先に述べた研究課題名に変更している。その理由を含めて研究実施内容を述べる。

保育所では、発達に偏りや遅れがあり、発達障害と推測されても、診断がつかないまま入所する場合が少なくない。そのような子どもを「社会性の発達の遅れ」があると断定することはできない。日々の保育の中で、手探り状態ながらも社会性の発達を援助し続けるという考え方が適切だと考える。よって、診断がついていないものの保育士が経験的にも社会性の発達に援助が必要と思われる子どもという表現が適切と判断し「社会性の発達に遅れがある子ども」から「社会性の発達に援助が必要と思われる子ども」に変更した。

では、次に現在の研究の進行状況について述べたい。本研究では、上記の目的に沿って次のような方法で明らかにしていく。

### 2.1 研究方法

**対象**：入園当初は2歳児の男児A君と担当保育士B（以下、保育士Bと称す）とする。A君は、0歳児

より私立の認可保育園に入所していたが、こだわりが強く集団生活が難しかった。発達外来では、半年から1歳の遅れと言われ、自閉的傾向があるため療育にも通い様子を見ることになる。入園当初は、思い通りにならないと癇癪を起し、寝転がって自分の頭をたたく等の行為が見られた。保育士Bは、保育士歴20年以上で、過去に1人配慮が必要な子どもの担当をした経験がある。

**進め方**：保育所でA君と保育士Bが個別にやりとりをする映像を撮る。（主に自由遊びの時間）定期

的に映像を記録し、A君と保育士Bの相互交流を比較することで、関係発達の特徴をとらえる。さらに、保育士Bに、過去の映像と現在の映像と一緒に観て、振り返ってもらい、その気づきや思いをインタビュー（半構造化面接）する。

**分析**：保育士と対象児のやりとりの映像を行動コーディングシステム（DHK社）を用いて分類を行う。分類する行動カテゴリについては、保育士と子どものやりとりについて視線・非言語・感情・言語各16項目のカテゴリ（高橋2022）を使用する。

**倫理的配慮**：本研究におけるデータの収集とその取扱いについては、対象となる保育者と子どもの保護者の同意を得た。その上で、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会より承認（受付番号03-022）を受け、研究を実施した。

### 2.2 進行状況

上記の方法で、A君と保育士Bのやりとり（約1分～8分間）の映像を撮り続けている。ランダムに撮った映像約100場面から関係発達が見られる映像を選出している段階である。保育士Bのインタビュー（半構造化面接）を1回実施した。

### まとめと今後の課題

本研究は、保育所において社会性の発達に援助が必要と思われる子どもと保育士の関係に着目し、関係発達の特徴を明らかにすることを目的としている。現在、保育士と子どものやりとりの映像の中から、関係発達が見られる映像を選出している。今後もデータを収集し、行動を分析した量的データとインタビュー等の質的データを突き合わせることで保育士と子どもの関係発達が促される要因が抽出できるのではないかと考える。

### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和3年度大学院生研究助成(B)(DB2126)「社会性の発達に遅れがある子どもと保育士の関係発達の支援」より研究助成を受け行ったものである。現在の研究課題名は、2.研究実施内容で述べた理由により、「保育士と子どもの関係発達—社会性の発達に援助が必要と思われる子どもとのかかわり」に変更している。

### 引用・参考文献

滝川一廣（2017）子どものための精神医学。医学

書院

バーバラ・ロゴフ (2006) 文化的営みとしての発達. 新曜社

西脇雅彦・山田純子・村田緑 (2008) 広汎性発達障害幼児の統合保育 第2報—加配保育士とのかわりの視点から—. 治療教育学研究. 第28輯 103-112

高橋ゆう子 (2022) 自閉症スペクトラム障害の子どもと母親の関係性の変容—RDIを適用した一事例の検討—. 人間生活文化研究 No.3 62-72